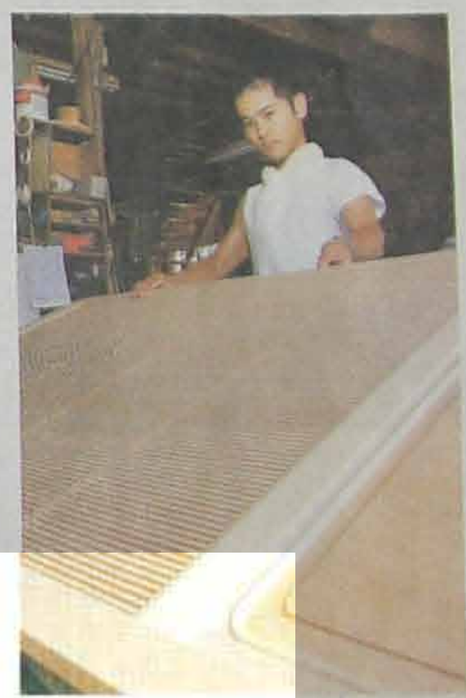
技のある風景

建具職人

谷口　大輔さん(27)　郡上市八幡町吉野

日本の風土に合わせて編み出された建具。日本人の細やかな感性を映し出している＝郡上市八幡町吉野、谷口武一さん宅



均整の取れた格子戸の出来をチェックする谷口大輔さん＝郡上市八幡町吉野、郡上八幡工芸「たにぐち」

無限の発想、挑戦は続く

郡上八幡工芸「たにぐち」の作業場では、職人たちが木材にかんなをかけて黙々と建具を製作している。仕事が一段落した谷口大輔さんが、均整の取れた美しい格子戸を見せてくれた。必要に応じて風を通せるように工夫された戸は、日本人が生活の中で編み出してきた知恵の結晶である。日本の風土に合わせて作り込まれてきた建具を製作するには、技術レベルの高さとともに、居住空間を演出する芸術性が求められる。

谷口さんが建具職人を志したのは高校生の時。父の武一さんは「岐阜県の名匠」に選ばれ、全国で数々の賞を受けている建具職人。谷口さんは幼いころから姉たちと一緒に父の手伝いをし、自然に建具職人の道に引かれていったという。父に連れられて訪れた建具組合の展示会で、全国から集まった職人の技の数々を目の当たりにし、感じ入った。

自分もこんな建具を作ってみたい！

建築も理解した職人になろうと、専門学校へ進学し、二級建築士の資格を取得した。すぐに豊橋市の建具職人に弟子入りした。初めは断られたが押しかけた。気持ちを抑えられなかった。「無心で勉強しました。惜しみなく自分の技を教えてくださる親方で、とても感謝しています」と親方の人柄を慕う。さらに「常に新しいことに挑戦し続ける姿勢に驚かされた」と強調する。親方が発表する曲線を生かした建具は斬新なデザインで、展示会での評価は賛否両論という。

谷口さんは五年間の修行を経て、父の下で仕事を始めた。最近は、父の顧客から仕事を任せてもらえるようになった。顧客のイメージしていることを自分なりに解釈して建具を作る。谷口さんは「納めさせてもらった時に、お客さんからイメージ通りや。あんたに任せてよかったわ、と言われた時が格別」と笑顔をみせる。

さらに、修行先での経験をベースに「昔ながらの建具では父の足元にも及ばないが、自由な発想で建具を作りたい」と新しいデザインの建具作りにも挑戦する。顧客ニーズが多様化する中、古風な建具と同時に新しいデザインの建具も求められるようになると考えるからだ。その際も「こんなことをしていられるのも、職人さんたちが陰で支えてくれているからこそ」と謙虚な気持ちを忘れない。

純和風住宅が好まれなくなり、大手の規格品も参入する中で、先行きが明るい業界では決してない。その中で「高級品でなくてもいいので、住まいに和風の建材や建具を希望する若い人に増えてきているのはうれしい」と谷口さんは話す。「お客さんから『あんたのところがいいよ』と言ってもらえる職人になりたい」。目標は高いが、一歩一歩確実に歩み始めている。

■文・井上吉博
■写真・安藤茂喜